

令和 5 年 10 月 23 日現在

機関番号：35410

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13134

研究課題名（和文）ADHD行動特徴に対する保育者の原因帰属と保育実践の関連

研究課題名（英文）The Relationship between Early Childhood Education and Care Teachers' Cognition and Childcare Practices for Externalizing Problems of Children

研究代表者

濱田 祥子（HAMADA, SHOKO）

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：20638358

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、攻撃性や多動性などの外在化問題への保育者による対応が、外在化問題に対する評価、背景要因の推定及び保育方法とどのように関連するのかを定量的に検討した。まず、自由記述データの概念的整理に基づく保育者用の項目を作成した。作成した項目を用いた質問紙調査の結果、外在化問題の背景要因に保育を推定することは多様な対応と関連し、子どもや家庭に関する要因を推定することは不適切な対応と関連することが分かった。また、まとまりが高い保育は外在化問題に対する負担感があり、不適切な対応と関連した。一方、個別性が高い保育は対応が可能であると考え、不適切な対応を除く全ての対応と関連することが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの保育者が対応に困難さを感じる外在化問題に関して、対応と関連する要因を検討した。背景要因に「保育」を推定することと保育方法の「子ども中心・個別保育」は、不適切な対応を除く多様な対応と関連した。一方、保育方法の「保育者主導・まとまり保育」は不適切な対応と直接的に関連した。子どもと保育者の相互作用の悪循環を防ぐ介入可能な要因を初めて明らかにし、保育者支援へ重要な示唆を与えた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the relationship between ECEC teachers' appraisal, inferring background factors, and responses of externalizing problems and methods of ECEC. First, items for ECEC teachers were created based on free description data. The results of the questionnaire revealed that inferring ECEC as a background factor was associated with diverse responses, while inferring factors related to children and families was associated with inappropriate responses. The more teacher-directed methods were found to be more burdensome and to have more inappropriate responses. On the other hand, child-centered methods were higher in all responses except inappropriate responses.

研究分野：発達心理学

キーワード：保育 外在化問題 評価 帰属 生物心理社会モデル

### 1. 研究開始当初の背景

外在化問題を含み「気になる子ども」に対して保育者は手探りで対応しており、そのなかには有効とはいえない厳しい指導や制限等が含まれることが指摘されている(緒方, 2019)。保育者が多様な対応を組み合わせても、これらの不適切な対応が含まれることによって子どもの行動は改善せず、加えて子どもと保育者の関係性にも悪循環が生じることが懸念される。そこで、保育者の不適切な対応、あるいはその他の多様な対応と関連する要因を特定することによって、子どもと保育者の両者を支援する一助となると考えた。

### 2. 研究の目的

ADHD(注意欠如・多動症)は、DSM-5(American Psychiatric Association, 2012)の診断基準では、不注意症状と多動性/衝動性症状のそれぞれ9項目のうち、どちらかにおいて6項目以上が家庭や学校などの2つ以上の場面で、少なくとも6カ月以上持続し、症状が社会的、学業的・職業的機能を損ねていることが明らかであることと示されている。また、多動性を含む、反抗性、攻撃性などの環境との葛藤に関する行動の諸問題は外在化問題と呼ばれる(Achenbach, 1982)。保育現場では、外在化問題は「気になる子ども」と称される概念に含まれる。「気になる子ども」とは、「発達障害や親の養育態度等も含む、発達や行動において配慮が必要と思われる幼児を指す(大河内・田高, 2014)。「気になる子ども」の研究において、外在化問題の顕在率や保育者が問題視する程度は高く(本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島, 2003; 久保山ほか, 2009; 和田, 2021など)、保育者は何かしらの対応が必要だと考えていることが分かる。

保育は様々な人的・物的環境を通して発達のプロセスを支える営みであり、外在化問題に対して保育者が選択しうる対応は多岐にわたる。外在化問題を含む「気になる子ども」への対応では受容や褒めなどと同時に注意や指導が挙がる(緒方, 2019)。また、保育者の認知や対応は行動特徴によって異なり、他の行動特徴に比して外在化問題を否定的に捉え、厳しい指導や制限をする傾向が示されている(上山・杉村, 2018)。さらに、外在化問題では保育者と子どもの相互作用による行動や関係性の悪化が指摘されている(Doumen et al., 2008; Partee, Hamre, & Williford, 2020など)。行動や関係性の悪化をもたらすのは保育者による厳しい指導や制限であり(Hagekull & Hammarberg, 2004; 平澤・藤原, 2001)、これらは不適切な対応といえる。

以上の研究を踏まえると、外在化問題には不適切な対応がされやすく、子どもと保育者の相互作用の悪循環が憂慮され、子どもと保育者の両者にとって支援が必要な状況といえる。まずは、なぜ保育者は子どもとの相互作用に悪循環が生じるような対応をするのかを明らかにする必要がある。そこで、本研究は外在化問題に対する保育者の対応に影響する要因を検討し、悪循環を防ぐ手立てや保育者支援の一助とする。

本研究では、外在化問題への対応に影響する認知的側面として、評価と背景要因の推定の2つの要因に着目する。1つ目の評価は、行動の評価と対応の評価に2分できる。行動の評価は、行動を問題視するか否かという行動自体の評価であり、保育者が行動を問題視するほど子どもへの命令が増えること(Dobbs, & Arnold, 2009)などが明らかとなっている。対応の評価は、負担感や責任性などの対応に伴う感情や思考に関する評価である。負担感は「気になる子ども」の研究で数多く報告されている(池田ほか, 2007; 和田, 2021など)。また、責任性について、小学校教師を対象とした研究では、教師は問題の原因に関わらず、問題に対応しなくてはならないと感ずることが示されている(速水, 1983; Pohlman, Hoffman, Dodds, & Pryzwansky, 1998)。

2つ目の背景要因の推定は、「なぜこのような行動をするのか」という行動の背景にある原因を推定することである。原因帰属研究では、他者の行動の原因を状況要因よりも内的要因に帰属する根本的な帰属の誤りや、自分に都合のよい帰属が示されている(外山, 2017)。保育者が外在化問題を子どもの内的要因に帰属することは不適切な関わりと正の相関、情緒的なサポートと負の相関が認められている(Carter, Williford, & LoCasale-Crouch, 2014)。一般に、原因帰属研究は、原因が子どもの内的要因か外的要因かという所在の観点によるものが多く、保育に関する具体的な背景要因はほとんど検討されていない。研究結果を保育に還元するためには、具体的な背景要因を扱った研究が必要である。

以上から、本研究の目的は外在化問題に対する保育者の対応と認知的側面である評価ならびに背景要因の推定との関連を定量的に検討し、対応に影響する要因を明らかにすることである。加えて、保育方法、保育経験年数と評価、背景要因の推定、対応との関連を探索的に検討し、保育者支援の一助とする。本研究では、保育者を対象に3つの調査を実施し、いずれも外在化問題に関する行動を示す5歳児男児の事例を呈示し質問紙に回答する方法をとった。1つ目の調査では、自由記述データに基づくカテゴリーの抽出をした。2つ目の調査では、背景要因の推定と対応を測定する項目を作成して質問紙調査を実施し、本調査用の項目を選定した(予備調査)。3つ目の調査は選定した項目を用いて外在化問題に対する保育者の対応と評価、背景要因の推定、保育方法の関連を検討した(本調査)。

### 3. 研究の方法

#### (1) 自由記述データに基づくカテゴリーの抽出

参加者：著者が講師を担当する保育者研修に参加した保育者 117 名に質問紙調査を実施した。回答者 78 名（回収率 66.7%）のうち、分析対象は 77 名であった。

調査内容：男児の事例を呈示し、背景要因、対応について自由記述で回答を求めた。また、行動の評価 6 項目、対応の評価 9 項目、保育方法 6 項目について 6 件法で回答を求めた。

#### (2) 予備調査

参加者：保育者 310 名に質問紙調査を実施した。回答者 269 名（回収率 86.8%）のうち、回答に不備のあった 37 名を除いた 232 名を分析対象とした。

調査内容：保育者の自由記述データを参考に項目を作成し、発達心理学を専門とする研究者 2 名、保育経験者 2 名が内容を検討した。男児の事例を呈示し、背景要因の推定 58 項目、対応 76 項目について 6 件法で回答を求めた。

#### (3) 本調査

参加者：インターネット調査会社に依頼してアンケート調査を実施し、回答者 628 名を分析対象とした。

調査内容：男児の事例を呈示し、行動の評価 10 項目、対応の評価 13 項目、背景要因の推定 32 項目、対応 54 項目について 6 件法で回答を求めた。また、保育方法 12 項目について 6 件法で回答を求めた。

いずれの研究も、所属機関の倫理審査を受け、承認を得て実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 自由記述データに基づくカテゴリーの抽出

外在化問題に対する背景要因は 6 カテゴリーに分類され、上位概念に生物心理社会モデル（biopsychosocial model）（以下、BPS モデル）の枠組みが用いられている。BPS モデルは、人間の発達や身体的・精神的機能を「生物」「心理」「社会」の 3 側面の相互作用から捉え、効果的な治療や介入をするための枠組みである（Engel, 1977）。BPS モデルに基づき、背景要因は「生物」に関する「障害」「未発達・未学習」、心理に関する「子どもの意思」、社会に関する「家庭環境」「保育環境」「園での関係性」に整理された。

続いて、外在化問題に対する対応は 10 カテゴリーに分類され、上位概念に杉村・桐山（1991）の「受容」「意図」に「理解」を加えた 3 つを設定している。「受容」は子どもを尊重し子どもの枠組みで発達を援助することであり、「受容的関わり」「本人の気持ちを尊重した遊び・活動の導入」「他児との仲立ち」が該当した。「理解」は援助の方向性を探ることであり、「気持ちの確認」「アセスメント」「園内環境」「家庭との連携」が該当した。「意図」は保育者の枠組みで子どもの行動を望ましく方向づけることであり、「指示・説明」「褒め」「保育環境の工夫」が該当した。

背景要因と対応の関連を記述数やカテゴリー数により検討したところ、「背景要因の記述数」「背景要因のカテゴリー数」「対応の記述数」「対応のカテゴリー数」の間には強い正の相関が認められ、多様な背景要因を推定するほど多様な対応を考えることが示された。

#### (2) 予備調査

項目は保育者の自由記述データを参考に作成した。発達心理学を専門とする研究者 2 名、保育経験者 2 名が項目を検討し、最終的に背景要因 58 項目、対応 76 項目を選定し、それぞれ当てはまる程度を 6 段階評定で求めた。探索的因子分析の結果、背景要因は 6 因子を採用した。対応は 6 因子と 9 因子が抽出されたが、6 因子では濱田・杉村（2022）の「褒め」のカテゴリーに含まれる全項目が、9 因子では「本人の気持ちを尊重した遊び・活動の導入」のカテゴリーに含まれる全項目が、除外された。そのため両因子構造ともに保育者が考える対応を網羅しておらず、内容的妥当性という点で課題がある。したがって、6 因子と 9 因子の結果を勘案し、10 因子を想定して本調査用の項目を作成することとした。最終的に、背景要因 32 項目、対応 54 項目を本調査で用いる項目とした。

#### (3) 本調査

作成した項目を用いて全国の保育者を対象にアンケート調査を実施し、628 名の回答を分析した。変数間の影響を検討するために共分散構造分析を行った結果、最終的に得られたモデルの適合度は  $2(81)=96.616$ ,  $p=0.114$ ,  $GFI=.987$ ,  $AGFI=.955$ ,  $CFI=.998$ ,  $RMSEA=.018$  と十分な値であった。有意なパスは 79 本得られ、保育経験年数、保育方法、行動の評価、対応の評価、背景要因の推定の様々な要因が複雑に関連して対応が選択されることが分かった。

変数間の関連は以下の通りであった。まず、評価と対応の関連については、責任性が様々な対応の生起に影響することが示された。次に、背景要因の推定と対応の関連については、背景要因に保育を推定することは不適切な対応を除く多様な対応と関連することが分かった。また、子どもに関する要因や家庭に関する要因の推定は不適切な対応との関連が示された。これらの結果から、不適切な対応をもたらすのは、背景要因に子どもや家庭を推定して保育を推定しない「自分に都合のよい帰属」であることが示唆された。保育方法に関しては、まとまりが高い保育は外在化問題に対する負担感があり、不適切な対応と直接的に関連した。一方、個別性が高い保育は行動を問題視しつつも対応が可能であると考え、背景要因に保育を推定し、不適切な対応を除く全ての対応と関連することが明らかとなった。最後に、保育経験年数と外在化問題に対する認知や対応との関連は、保育方法と比べて相対的に低い関連であることが示された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 13件）

1. 著者名 清水 寿代、濱田 祥子、上山 瑠津子、杉村 伸一郎	4. 巻 43
2. 論文標題 広島県における幼児教育アドバイザー訪問事業の効果検証：3年間の縦断的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 5～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51493	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 杉村 伸一郎、上山 瑠津子、濱田 祥子、清水 寿代	4. 巻 43
2. 論文標題 幼児教育アドバイザー所感における助言の内容とタイプ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 15～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51494	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上山 瑠津子、杉村 伸一郎、清水 寿代、濱田 祥子	4. 巻 43
2. 論文標題 幼児教育アドバイザーによる継続訪問の効果：所感の変容の分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 25～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51495	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 濱田祥子、越中康治、松井剛太、山崎晃	4. 巻 8
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症が就学移行期のカリキュラムへ与えた影響に関する実態調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比治山大学教職課程研究	6. 最初と最後の頁 187～198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 濱田祥子、緒方満、加納章、鹿江宏明、酒井研作、森川敦子	4. 巻 28
2. 論文標題 遠隔と対面を併用した入学前教育プログラムの実践と効果検証の報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 103～112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森川敦子、酒井研作、濱田祥子、中村佳子	4. 巻 28
2. 論文標題 小学校の平和学習における広島・長崎の交流と意義 (2) 2年間の平和交流会をもとに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比治山大学紀要	6. 最初と最後の頁 75～86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱田 祥子、森川 敦子	4. 巻 58
2. 論文標題 保育学生のグループ活動における集団機能の変容過程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 115～127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20617/reccej.58.1_115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 濱田祥子・島本好子・辻明妃・菅原知恵子・村上麻由香・小田実里・村上紗綾・坂本みずえ・平田麻奈・佃文香・岩本充正・兼田里恵・手塚由美・中丸元良	4. 巻 27
2. 論文標題 SICSによる「私たちの保育実践あるある」の振り返り 他園の保育者との保育カンファレンスを通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比治山大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森川敦子・酒井研作・濱田祥子・中村佳子	4. 巻 27
2. 論文標題 小学校の平和学習における広島・長崎の交流と意義 ESDの視点を踏まえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比治山大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 85～96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山崎晃、松井剛太、濱田祥子	4. 巻 6
2. 論文標題 幼稚園・小学校・中学校・高等学校における個別の教育支援計画と個別の指導計画の関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子ども学論集	6. 最初と最後の頁 1～13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松田侑子、濱田祥子	4. 巻 4
2. 論文標題 保育者志望学生を対象とした応用行動分析に基づく援助スキル訓練の試み ティーチャー・トレーニングによる子どもの行動とその対応に関する理解の変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育者養成教育学研究	6. 最初と最後の頁 81～91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱田祥子	4. 巻 28(2)
2. 論文標題 ADHDの行動特徴に対する保育者の原因帰属と対応の関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 LD研究	6. 最初と最後の頁 283-295
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若林紀乃・上田敏丈・越中康治・岡花祈一郎・中西さやか・濱田祥子・廣瀬真喜子・松井剛太・八島美菜子・山崎晃	4. 巻 27
2. 論文標題 就学移行期における障害のある子どもへの配慮の引継ぎ なぜ就学前の日常的な配慮が小学校で活用されにくいのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 乳幼児教育学研究	6. 最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 越中康治・上田敏丈・若林紀乃・濱田祥子・岡花祈一郎・中西さやか・廣瀬真喜子・松井剛太・八島美菜子・山崎晃	4. 巻 40
2. 論文標題 就学移行期における障害のある子どもに関する記録物の作成と活用に関する実態調査：就学前施設と小学校を対象として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 濱田祥子・松井剛太・八島美菜子・山崎晃	4. 巻 5
2. 論文標題 幼保小接続カリキュラムの意義と課題 保育者と小学校教諭に対するインタビューから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比治山大学・比治山短期大学部教職課程研究	6. 最初と最後の頁 24-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森川敦子・新田和浩・濱田祥子	4. 巻 5
2. 論文標題 児童の学校適応感を高める道徳教育プログラムの開発 小学校第5学年の実践をもとに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比治山大学・比治山短期大学部教職課程研究	6. 最初と最後の頁 78-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 濱田 祥子、杉村 伸一郎	4. 巻 44
2. 論文標題 気になる子どもの外在化問題に対する保育者の認知と認知傾向のフィードバックの有効性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 35～47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/53085	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 濱田祥子・越中康治・松井剛太
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症による就学移行期のカリキュラムへの影響 緊急事態宣言時における保育者・小学校教員へのアンケート調査
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱田祥子・吉田弘司・林武広
2. 発表標題 顔写真による年齢認知の発達的变化 空間周波数の特性に着目して
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田侑子・濱田祥子
2. 発表標題 保育学生を対象としたTeacher Trainingの効果検証(5) 介入後の実習を踏まえた短期縦断的变化
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 越中康治・松井剛太・濱田祥子・山崎晃
2. 発表標題 保育者と小学校教員の就学移行期の子どもへの対応 保育場面と学校場面における対応の比較
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森川敦子・濱田祥子・牛島智子
2. 発表標題 幼児の逸脱行為に対する保育者と療育者の重大性判断と対応の比較
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田侑子、濱田祥子
2. 発表標題 保育学生を対象とした Teacher Training の効果検証(3) 面接調査による質的分析を通じて
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松田侑子、濱田祥子
2. 発表標題 保育学生を対象としたTeacher Trainingの効果検証(4)
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松田侑子・濱田祥子
2. 発表標題 保育学生を対象としたTeacher Trainingの効果検証(2)
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松田侑子・濱田祥子
2. 発表標題 保育学生を対象としたTeacher Trainingの効果検証(1)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関